

本年度・後期の会員著書一覧

(令和3年6月～8月、*印は税別)

水の自画像〈歌集〉令3・7刊

高野公彦 短歌研究社・3000円*

雪麻呂〈歌集〉令3・7刊

小島ゆかり 短歌研究社・3000円*

楢田軌道〈歌集〉令3・7刊

松尾祥子 角川書店・2600円*

琥珀夕映え〈歌集〉令3・7刊

竹内みどり 柘書房・2530円

小丸川の瀬音〈歌集〉令3・8刊

長尾和守 飯塚書店・2000円*

ドルフィンキック〈歌集〉令3・6刊

斉藤淳子 柘書房・2530円

鳩寿燦々〈歌集〉令3・6刊

北條忠政 柘書房・2530円

戦あらずな〈歌集〉令3・6刊

島田 暉 角川書店・2600円*

農婦の証〈歌集〉令3・6刊

青野多都留 柘書房・2530円

【注】批評特集に取り上げるのはコスモス叢書だけです。
叢書の登録方法については、本年「コスモス」三月
号の表Ⅲ(179頁)をご覧ください。

生と死へのまなざし

津 金 規 雄

第十六歌集。二〇一九年一月から二〇二一年五月までおよそ二年半の作品を収めている。元号でいうと平成三十一年から令和三年に当たり、「七十八歳老眼かすみめなれば」「七十九となりて静かに年酒としのめ楽しむ」とあるとおり七十代の仕舞に近い日々が詠まれている。まず何よりもほどなく八十代を迎えようとしている著者の健康を喜びたい。

一方そうした中で折に触れ湧き上がって来るのは、最期の時への思いである。それは著者だけに限らない、同年代の人ならば誰しも抱く感懐に違いない。だが死への思いは若い時から歌われていた。ようやくにして実年齢がそれを身近なものと感じさせるに至ると、次のような歌が生れて来る。

生き変はり死に変わりする生命の奔流のな
か蝶も僕もゐる
老若男女ひとりひとり沈黙の伴走者あり

その名（死）といふ

地球に生れたひとしづくの生命体、それは昆虫であれヒトであれ、巨きな視点から見れば大差はない。いづれは消えてゆく仲間たちであるときえ言える。そして自分もその一員で

あることにちがいはない。

ところがここで思わぬ事態が著者をそして世界を覆う。新型コロナウイルスの爆発的流行と、それに伴う社会生活の大きな変化である。日常生活での思いもかけないさまざまな自由さに直面する。そしてとりわけ痛感させられるのは、日々独りで過すということ。

飯を食ふ時も散歩の時も独りコロナ籠もり
は遠流とんりゅうのごとし

コロナ禍の或る日おもへりにんげんは話し
相手が無ければ 海鼠

そして語り相手もなくひとり思いを巡らす時、やはり次のような思念がおのずと湧き上がる。

死は元の無に帰るのか新たな空そらに行くの
か夜明け思ふこと

初めに引いた二首に比べると、こちらはさらに淡々とした詠みぶりだが、より注目したいのは「新たな空」とあるように、死もまた一つの未来ととらえ始めたかのように思われることだ。著者はある境地に至ったのだろうか。どうやらそ

う思うのはまだ早いらしい。「死は元の」の歌に続いて歌集タイトル由来となった、次の一首が現れる。

断崖を大落下する一瀑布その純白は水の自
画像

「断崖」「大落下」と強い語調の言葉が続き、それを受ける「一瀑布」の響きもまた大きい。さながら轟音が聞こえるかのようだ。著者にはやや珍しい言葉の選択のようにも思える。だが「その純白は水の自画像」と下の句では一転して静かな自省の態度が示される。ここからも分かるように、この瀑布はどこかに実在する名瀑などではなく、心象風景としてのそれと考える方がよい。一連十九首を見渡してもさまざまな対象が歌われていて、ある特定の土地を訪ねた形跡はない。そもそも他に滝を詠んだ歌はないのである。歌集初めの方に、南米ギアナ高地にある世界最大の落差をもつ「エンゼルフォール」を詠んだ一首があるが、それとも思い描くにとどまっただけで、実際に滝の前に立つてのものではない。

一連の中で数の上で目立つのはやはり新型コロナウイルスの歌であり、そして何よりも生と死を見つめた歌である。

「自画像」の次の歌を見よう。

疫病あり荒ぶる神の須佐之男よ巨き息嘯も
て国浄めせよ

古代神話の神に祈りまた命じるほかはないのかと思われる、ひたぶるな歌だが、こうした心を解き放った詠み方はかつての著者には多くなかった。この歌は古代の意匠を用いた社会詠であり、その技巧のためあつてまだいくぶんかパロディ

の要素が残っている。しかし次のような歌はどうだろうか。お母さんほくは生きたい雨あとの月夜のその虹を見るまで

幼子がつぶやくような、無防備とさえ見える歌いぶりもまた、技巧と受け取るべきなのだろうか。いやたとえそうであったとしても、技巧を超えて訴えて来るその声に耳を傾けた。これまで見てきたのは多少なりとも老齢を意識したうえでの生死への思いだったが、ここに聞こえるのは母親に甘える幼子の偽りのない率直な告白である。夜空にかかる虹は昼間のそれに比べると、やや白っぽいのだという。そうしたあえかなものへの憧れが、亡き母への思いに重ね合わされている。そして母への思いは同時に故郷伊予への思いでもある。

ふるさととは帰る家なし伊予の海も伊予びと
たちも優しきものを

春一日松山付近の（八か所）を母と巡りき
二人お遍路

この二首が同じページに仲良く並んでいるのが、それを物語る。そして歌集の初めの方に置かれているこの二首に響き合うかのようにして、歌集一卷を閉じるのもまた母への呼びかけの歌である。

8 光年かなたに点る爾ありて母への麗しき
ディスタンス

下の句には、よく知られた吉田一穂の詩「母」の一節を取り入れてある。その詩句は言う、母への距離は「つねに遠のいてゆく風景……」なのだ。

自分を待む

藤野早苗

第十五歌集。二〇一八年夏から二〇二〇年秋にかけての作品四五一首を収める。ゆかりさんの出版ペースはここ数冊、ほぼ二〜三年。そうすると本歌集『雪麻呂』を読みながら、まだまだ記憶に新しい以前の歌集に連想が及んでしまうこともしばしば。たとえば、

肉球のあらばさくららのちる夜を音もなく会

ひにゆきたし考に

この一首からは第十歌集『さくら』に収録された

闇を跳び光をくぐりわが猫よ ちちのたま

しひを尾行せよ

を思う。『さくら』では父のたましいを尾行するのはゆかりさんの愛猫なのだが、それが本歌集においては自身が猫になり彼岸の父に会いに行きたいと願う歌になっている。『さくら』『純白光』『泥と青葉』に詠まれた壮絶な父上介護の日々。二〇一三年の父上ご逝去以降の時間は、ゆかりさんの中の父がよみがえる時間でもあったのだろう。本歌集に立ち現れる父上の姿が娘を愛し続けた懐かしい父であることが嬉しい。

これの世の悲しきことも楽しめとちちのこ

ゑする満月の夜

それにしてもゆかりさんの介護生活は長い。「夕陽こんなうつくしけれど 半端ない介護の月日もう二十年」。「半端ない」という軽い言葉に込められた歳月の重さを感じる。

息子もうわからぬ姑と手をつなぎ 歳月は

花束とピストル

文字書けずなりたる母が書きたくて書きた

くて書く流星の文字

かねてより認知症を患っていらした義母上。一首目「花束とピストル」の本歌は鷲巢繁男の無季句「花束とピストル置かれ 不在の神」であろうか。「花束」はおそらく愛や生の象徴、では「ピストル」は……と考えた時、入所施設を訪い、「息子にもあなたのやうな嫁欲しと姑言ひ出づるさくらの日なり」というほどに心を尽くして介護するゆかりさんの、「不在の神」を思わずにはいられない深い混沌を覗く気がした。また二首目では身体的な不調により乱れてしまった母上の筆跡を「流星の文字」と喩えている。家族を襲う異変に向かう時、その人がかつて怜悧であればあったほど悲しみは深

くなる。字が書けないのではなく、母は「流星の文字」を書いているのだという把握が美しく悲しい。同居されていた母上を詠まれた作品は「母」という言葉が明記されたものだけでも四十八首に上り（渾身の長歌一首を含む）、その数からもゆかりさんの母上に対する思いの深さはまぎれもない。

帰りきてまづ飲む水にくろがねのひびきあり
酷熱のゆふぐれ

ゆつくりでいいからいいからくりかへし母
に言ふなり急ぐわたしは

介護できる幸せなんて簡単に言ふ人ちよつ
と信用できません

それでも、である。いくら思いが深くても介護という厳しい現実に心折れる瞬間は必ずある。

介護なほつづき 大きな黒い魚ゆらりと胸
にうごくことある

身の内に住む薄暗い何かから目を逸らさず詠うゆかりさんの誠実さにまたしても読者は心打たれるのだ。

冷えわたる夜の澄みわたるかなたよりもう
すぐ天の雪麻呂が来る

白眉の垂眉のよき翁顔たまゆら浮かび夜の
雪くる

歌集名の由来となった一連から引いた。雪になりそうな寒夜の気配をこれだけ詩的に昇華できるものだろうか。「天の雪麻呂」という名付けの妙にも感じ入る。この一連一読後、

雪来るかも雪来るかこの夜のガラス窓つ

ひに恍惚とせり

『希望』

を思い出した。『希望』から二十一年。これはゆかりさんの長い介護の時間に重なる。「希望ありかつては虹を待つ空にいまはその虹消えたる空に」(『希望』)に顕著なように、私はゆかりさんを「仰向く人」だと思っている。日常に心底疲れた時も眼差を上げて空をふり仰ぐ。ゆかりさんの作品に通底するある種の聖性はこの仰向くという姿勢にあるような気がする。そのモチーフに変わりはない。けれど二十年余りの歳月が小島ゆかりという歌人に与えた変化はやはり侮れない。『希望』に詠まれた雪を待つ歌のリフレインがやや早口で、下旬で種明かしされた感があるのに対し、「雪麻呂」の歌は「わたる」という複合動詞のリフレインが、しつとりと湿り気を帯びた冬の夜を描写し尽くしている。続く二首目の「白眉の垂眉のよき翁顔」にはついつい亡き父上を思ってしまう仕掛が施されているようだ。融通無碍の境地を思わせる小島短歌尿する犬見てあれば人生の途中の時間あた

たかくなる

孫はすみれ春の野原の花なれば上手に夫と
遊んでくれぬ

散歩途中の犬を詠み、愛おしい女孫を詠み、作品は豊かに肥え、温かい。けれどこうした作品の背景にあるのは人生の鹹さを知り尽くしたひとりの人間の諦観と覚悟であることを忘れてはならないと思うのだ。

夜の窓全開にしてこんりんざいたつたひと
りの自分を持つ

戦あらすなの思い

丹波真人

本歌集は、島田暉さんの第五歌集になる。ストレートで強いひびきのタイトルが、何よりも著者の主張を表しているように思う。その歌が次の一首である。

外つ国にそそのかされてもつつかかれても一生に二度の戦あらすな

この強い反戦の思いは、昭和九年という著者の生年に大いに関わりがあるように思われる。開戦時が七歳で、それから続く戦争の日々に幼少年期を過ごした体験があるのだ。なお余談になるが、歌人の中には同年の仲間とグループをつくり定期的に勉強会やらアンソロジーを出したりして活動している集団がいくつかみられる。主なものは、昭和十九年の会、昭和二十三年生まれの人たち、そして著者の属する昭和九年生まれの歌人の会などを挙げる事が出来る。島田さんは、この昭和九年生まれの歌人の会の中心メンバーとして何回かのアンソロジーをまとめられていて、その何冊かを拝読したこともある。

さて、本歌集にも従来と同じく、戦時を回想して詠まれた作品が多くあるが、そのいくつかをまず紹介しておきたい。

モンペはく上級生の女子児童竹槍持ちて藁人形刺す
 校庭の春の光を切り裂きて薙刀ふるふ女子児童らは
 疎開児が機銃の真似して撃つときのしつきき苛め今も忘れず
 弁当の玉子焼きを先生に見つけられ非国民とぞ弁当取られつ

ここには、とても具体的に当時の国民学校生徒らの学校生活が描かれていて、記録の点でも貴重なものと思われる。一首目、二種目の女子児童の歌はそれぞれ具体的に描かれていて生き生きと伝わるものがある。三首目の歌は、疎開児という言葉から、著者とはやや距離のある姿が伝わり、それだけに相容れない者どうしの確執が見えてくる。最後の歌には戦時とはいえ今では考えられない理不尽なものが伺える。貴重品であつたらう玉子焼きを先生みずからが取り上げてしまふとんでもない内容から、改めて非情さが伝わってくる。

次に、戦時下にあつて、逃げのびた側の視点から詠まれた

数々の作品を紹介してみたい。

夏来れば眼裏を灼く大空襲火だるまの樹に
飛び来る死体

背負はれし赤子が口あけ死にてるぬ火の中
逃げて母泣き叫ぶ

白熱の炎が水面を這ひてゆき浮かぶ頭の髪
が燃え出す

たてがみに火がつきし馬たけり狂ひ火の粉
の中を逃げまどふなり

鉄柱はぐにやぐにや曲がり窓ガラス飴のご
と垂れ工場残る

この戦時詠とも呼ぶべき五首は、どれも具体的に目撃した
景として戦争の一場面が把握されていて、いずれも迫力をも
って迫ってくる。さらに、これらの戦時詠につながる次のよ
うな戦争詠もあって息を呑みつつ読みすすめた。「敗戦後」
という一連の中にあるが、いずれも戦争の影を色濃くひきざ
つている作品と思われる。

終戦の臨時ニュースを聞き終へて酷暑に歪
む電車を見たり

満員の電車に押し乗り押し込まれ車内はす
でに込み合ふ棺

昼どきの一斉検札ありたればヤミ米包みホ
ームに山なす

奪衣婆のお迎へしばしことわりて車内に妹
は立ちて眠れる

石炭の積まれし貨車に昇り乗り海よりの風
に吹かれて帰る

被災者の焼け残りし声呻く声雨の上野駅人
影まばら

上野への常磐電車満員なりヤミ米背負ひ両
手に下げて

これらの光景は、戦後まもない東京近郊のもので、著者も
その中の一員という視点があつて生なましく伝わる。

最後に、この歌集は回想詠も含めて、戦争につながる歌が
多くを占めるが、それはタイトルに示されているように、現
今のきな臭い世相への警告ととれないこともない。

なお、固くるしい雰囲気を少しほぐしてくれる作品として
妻君の登場するものが案外多いことも指摘しておきたい。ま
た犬の歌も多く、犬と妻君が双壁と言えるかも知れない。

六本の包丁秘めたるキッチンに妻はときを
りひとり笑ひす

吾妻とは野党も与党もあらざりきめんどう
なれば阿吽の呼吸

月光の溜まるところに棲みたしと妻がもら
せりミモザ咲く村

釜の中に残りし飯のまだあらむ妻は言ひ捨て
て羽根はえて出づ

老いぼけし犬と話せる妻の声居間より漏れ
来常世のごとし

にじむ風格

木畑紀子

『月と海』に続く六年ぶりの第五歌集である。二〇一五年から二〇二〇年までの四六九首、年齢でいうと五十代後半から六十一歳までの作品で、還暦という節目をまたぐ松尾祥子さんの歌世界は、さまざまの人生の試練を経て、肝が据わったような風格をみせている。

かたいとの逢瀬叶はん月光の入りくる窓を
ほそく開きぬ

河豚を食みひれ酒を呑み酔うてをり娘ふたりとわれと、亡き夫

賑やかに迎へん夫の五年祭子らは伴侶得て子を授かりて

一首目は歌集のはじめの方にあり、ご主人の急死からまだ二年たらずのころと思われる。「かたいとの」という枕詞、窓を「ほそく開く」という行為に寂寥感がありありと読み取れる。二首目も、結句の読点のあとの「亡き夫」に濃厚な存在感があり、かつての家族団欒をよみがえらせてせつない。だが三首目になると、状況が変化し作者も変容をはじめている。お嬢さん二人が結婚し、またほとんど同じ頃第一子を出

産、そして松尾さんは以前にまして、多忙をきわめるようになるのだ。もちろん夫は作者の中に生き続けている。

彼岸此岸違へどともに居るやうな半月が抱く半月の闇

半月の照る部分が夫で、闇の部分が作者、と取れば作者は夫に守られながら生きているが、この婚や出産の喜びにいたるときは、彼岸の闇に居る夫を抱きしめている。明暗はときに反転しながら、一つの丸い月として二人が存在することに気づき始めたのだろう。一卷を読み終えたとき、日野原重明の「生き方上手」という言葉がふと思われた。氏の本を詳しく読んではいないが、試練を越えるために人は生き方を変えることができると言う。松尾さんは、生と死を、闇と光をひとつのものと捉える生き方を獲得していったのだと思う。

さてこの歌集には死者生者を問わずとても沢山の人物が登場する。夫、母、娘、婿、孫、甥、姉、義兄、いとこ、師、先輩、歌の友人、同級生、等々、実に賑やかだ。

何とまあ丸顔丸鼻似てゐたる女四代ひとつ
屋根の下

ルーツみな中条町の（桂屋）のわれら乾杯
ののちのわやわや

宗教の異なる父、夫、甥ねむる（縁^{えだし}）の墓
に戒名はなし

どれも一人一人ではなく、生者、死者たちが集まって登場する歌。「丸顔丸鼻」には女四代の絆の濃さ、「乾杯ののちのわやわや」には血縁のあたたかさ、「戒名はなし」には何ものにも縛られない清らかさがある。ここには、世間にあるがちな人間関係の確執がいつさい見られない。人間同士、こんなにも和して生きていけるのは、やはり松尾さんの人柄だろう。

しなやかに風に揉まるる青竹をわが残生の
背骨となさん

歩き方講座で学び肩さげて内蔵あげて駅前
をゆく

三役の揃ひ踏みかな風邪、不眠、ストレス
襲ひヘルペスになる

「ありがとう」言はれるたびにうつし身に
ほわんとひらく朝顔の花

孫の世話に、老母の介護に多忙きわまりない日々ゆえ、倒れてしまったこともあるようだが、三首目のようにユーモアでいなす逞しさ、四首目のように他者の感謝を喜ぶ素直さはまさに青竹のしなやかさである。それは松尾さんが元来持っているものに加えて、「歩き方講座」などで積極的に学んで得たものであろう。まさに「生き方上手」なのである。

NHK学園短歌講座の専任講師として長く勤めている松尾

さんだが、二〇一五年からコスモスの選者になる。

文机に宮先生の写真置き慎みて初の選歌終
へたり

鉛筆とノートを丸末書店にて買へり 良き
歌詠めますやうに

選歌に作歌になんと慎ましいのだろう。もつとも心は初心だが、歌人として言葉に対する厳格さや、詩精神はますます研がれ、実り多い歌集であることも是非書いておきたい。

二足歩行する動物の美しきからだウサイ
ン・ボルトが走る

青梅雨のひと日こもれば平凡の凡のなかなか
る点のしづけさ

喃語にて通ずるらしも手をのべてふと見つ
め合ふみどりごふたり

梅の凹見つつ思ほゆ善人も悪人もひとつ臍
を持つこと

ほんの一例だがどれも詩人の眼が働いている。一首目や四首目には私性を離れて、人間の本质を見つめる鋭さがある。

二首目は「凡」と「点」がひびきあい簡潔な表現のなかに時空の広がりがある。三首目は絵画の趣。「楕円軌道」と名付けられた歌集だが、みどりごふたりが、楕円軌道をめぐる二つの惑星の出会いのように美しい。始めに書いたようにどれも「風格」のある歌である。控えめながらも松尾さんの歌に注ぐ情熱はまことに熱い。歌とはこんなにも生に直結したもののなのだ。多くの読者を励ましてやまない歌集である。

太陽に向かつて

水上比呂美

歌集『ドルフィンキック』は斎藤淳子さんの第一歌集である。(塗り替へのされたブルの煌々^{きらきら}しドルフィンキックを試してみよう)という歌から付けられた。あとがきに「ブルで心身を解放する心地よさは格別で、いくつか作品にしましたが、明るく元気のある一首で気に入っています」と述べている。歌集全体の明るさと勢いが伝わるタイトルだ。斎藤さんのパワーのある歌を紹介する。

ジャンプしてスパイク決めてみたかつたけ

ふの満月ましろいボール

両手足空にあづけて滑り台すべつてみたし

冬晴れの朝

ここぞわがハイライトなり用意してゐた右

足を宙に放りぬ

一首目、満月をバレーボールのボールに見立てるダイナミックな歌。二首目、足も手も万歳をして滑っている作者が浮かぶ。小題「笑つて踊る」の十数首から、信州の歌仲間とチアダンスをしていることがわかる。その素晴らしいダンスは、コスモス全国大会を盛り上げてくれる。三首目はまさにその

時の歌。すらりとした作者の脚が田原俊彦のようにピシッと高く上がった瞬間である。

明るさと勢いは、例えば半濁音と破裂音の組合せのオノマトペによって發揮される。

順番に端を引つ張り着せ替へのすんだおむすびパリッと囁る

半額のさらに半値でブランドの鞆を買ひ

ぬ ぱんツと冬晴れ

一首目、セロファンで包まれたコンビニなどのおむすびを食べるときの順番が巧みに描写されていて、「パリッと」乾いた海苔の感触と香りがストレートに伝わる。二首目の「ぱんツと冬晴れ」は、ブランドのバッグを四分の一の値段でゲットした作者の高揚感にぴったりだ。

斎藤さんは長野県公立高校の英語の先生をしていたが、二〇〇年に退職し、現在は非常勤講師として再就職している。学校を題材にした職場詠は、とても魅力的だ。

だぼだぼの違反ズボンの武者たちをむかへ撃たんと校門に立つ

白鳥の飛び立つ感じ一斉に試験ペーパーめ
くられてゆく

英語民間検定試験なんぞやとなんぞやぞや
と茂る杉森

一首目、服装、髪型の違反をしている生徒を「武者たち」、
目を光らせている作者自身を「むかへ撃たん」と詠んで、ど
こかユーモラスだ。武者たちの「やべ！」という声が聞こえ
てきそうだ。一方、髪型を変へたと噂のわたくしを見に来て
生徒が「ほんとだ」と言ふ」という歌から、生徒に慕われ
ている先生だということが伝わる。二首目、期末テストか、
作者は試験監督をしている。試験用紙がめくられる音と色を
「白鳥の飛び立つ感じ」と比喩して美しい。生徒たちがいつ
か、白鳥のように羽搏いてほしいと思う作者のまなざしも感
じる。三首目、二〇二〇年に「英語民間検定試験」導入が見
送られ、納得のいかない気持ちを「なんぞやとなんぞやぞや
と茂る」と詠んで上手い。

歌集の中で「手」を詠んだ歌に惹かれた。

パソコンを打つ手もサラダ盛り分ける手も
よし若き数学教師

気に入りの美容師の手を恋ひながらしくし
く伸びてゆくわが髪は

「母の手が^かいい」と拒まれ拗ねてゐる（婆
の手）風にかざして歩く

一首目、学校の同僚の男性教師の手に注目して、その人柄
の好ましさを詠う。二首目、嫁いで去ってしまった美容師そ

の人ではなく、その人の「手」を恋しく思う。髪の伸びるさ
まを「しくしく」というオノマトペで表して、作者自身の髪
がいじけているようなおもしろい表現だ。三首目、「母の手」
と「婆の手」を対比させて、作者の寂しさを詠む。

また、作者自身を詠んだ歌が素直でいい。

みぎひだり水切る腕のつややかに水はじく
見ゆ背泳ぎしつづ

わが裸身さらす鏡の奥みれば太陽が薄目あ
けて見てゐる

気まぐれな神が置きたる目と鼻と口ひと揃
ひわれの顔なり

一首目、背泳ぎする自分の腕を「つややかに水はじく」と
詠んで若々しい。二首目、この歌の前に「夏ぐもが窓全面に
かがやけり一四階の展望温泉」とある。窓から直接と鏡越し
に見ている太陽を容認する。三首目、神が気まぐれに置いた
部品を内面から磨いてきたのは私ですという自負がある。

斉藤さんの繊細な歌も印象深い。

りんごみな手放した木の嬉しさと寂しさお
もふ冬のはじまり

夫の両親はりんご園を営む。しばしば斉藤さんもりんごの
採り入れを手伝う。収穫を終えたりんごの木の気持ちは、生
徒を無事卒業させた作者と通じる感情があるのだろう。

手に入れて手放して、手放して手に入れて、人生はその繰
り返しかもしれない。常に前向きに太陽に向かって進んでい
く作者を心から応援している。

明日へのまなざし

齊藤 梢

『琥珀夕映え』は竹内みどりさんの第一歌集。二〇〇三年から二〇二〇年までの作品四六八首を収める。

的確に手早く手かずを惜しむなき夫は一途な電器屋である

アンテナの十四本の素子たたき雪を払ひぬテレビよ映れ

独り居の老いを閉ざせる大雪を掻きやり店の唇を配る

十分に満たぬ昼寝に飛び起きし夫より検電ドライバーの落つ

夫と共に電器店を営む作者。歌集には、その生活を実感をもって詠む作品が並ぶ。「あとがき」に「三十一歳で店を手伝うことになった私は、そこでお客様の機微や知恵に触れ数えきれないほど多くのことを学びました。」と記す竹内さん。「電器屋はよき仕事なり」と詠む作者もまた「一途な電器屋である」。店に居て電話をとったり、荷下ろしをしたり、チラシを配ったり、時にはお客さんの犬に敬語を使ったりの日々。作品から知り得る働く夫と作者の姿。二首目には、仕

事の現場が詠み込まれている。雪がアンテナに積ってテレビが映らなくなつたのであろう。「映れ」と願いつつ、素子をたたいて雪を払う冬の日が作者にはある。三首目は、人々の暮らして関わることも仕事のひとつであることを伝える。四首目は、忙しい仕事の合間に昼寝する夫を実写したような作品。「手かずを惜しむなき夫」を労う思いが滲む。

南風強き今日の砂丘のけぶりつつ飛砂は進めり意志あるごとく

匹がひたすら歩く
ノルマでもあるのだらうかわが部屋を蟻一

気化しゆくやうに時間の過ぎし日は昏き疎林をいだきてねむる

スパイスを合はせカレーをつくりたる夜の
スプーンは重きをえらぶ

病床の姑が最後に口にせしあんぱんのある
スーパード泣く

ある日ある時の感覚や感情を表現した歌には、生きる手ざわりのようなものがある。鳥取砂丘の風に飛ぶ砂を「意志あ

るごとく」と捉える作者もまた、生きる力を蓄えて鳥取の地で暮らしているのだと思う。二首目は、蟻を見ての作。蟻のひたすらの歩みに「ノルマでもあるのだらうか」と感じるひととき。作者の心にもある「ノルマ」だろうか。蟻を詠むことで、その時の自身の心情を語っているのかもしれない。三首目と四首目は、感覚の歌。働いて充実感のある日もあれば、「気化しゆくやうに」過ぎる時間もある。生きていればこそこのような感覚。そして、丁寧にカレーを作った夜の感覚は「スプーンは重きをえらぶ」なのである。五首目は、感情を直接的に表現することがあまりない作者が選んだ言葉としての「泣く」。大切な人を失ったという現実が突然に胸を締めつける。こらえきれない悲しみなのである。

白抜ききの（Ｙ）が日焼けし顎にありヘルメ

ットを脱ぐ警備員らに

棄てられし電気ポットは寒天下ため息ひと

つつかず冷えゆく

夫の胃をひととき満たせしジャムパンの袋

いちまい工具にまじる

心にとめたものとしての「白抜ききの（Ｙ）」、「電気ポット」、「ジャムパンの袋」。労働の証としての「（Ｙ）」に気づいた作者。夏の暑さの中を働く人への思いがあるからこそその一首だろう。二首目では、棄てられて冷えてゆく電気ポットだけけれども、ため息はついていないと詠む。役割を果たしたポットにある気概ゆえに、ため息をついてはいないのだ。そして、夫の工具にまじっている「ジャムパンの袋」へのまなざし。こ

の三首のような、生活の中で何を大切にしているかを示す作品にも惹かれる。

げんはつと読めばいいのにげんばつと音の

破裂がいやな日本語

ひかり射す窓に目をやる 生き辛さおぼえ

るひとのどこに咎ある

洪水の夜を避難所に拒まれしホームレスあ

り日本は終はつた

原発のことを考える時間があったの「げんばつ」という音への違和感。「音の破裂」は、福島第一原子力発電所の事故を思わせる。二首目でもきつぱりと思いを述べていて、「生き辛さおぼえるひと」へ向けられる社会の目への「どこに咎ある」であろう。家のない人へのしかかる現実を詠む三首目。結句の「日本は終はつた」という強い言葉には、鎮めることのできない怒りのようなものが表現されていて、命を尊重する一首でもある。

おほ空にのぼれぬ爪の半月のほのかに光る

胸塞ぐ日は

あしたにもあしたがあると思はせる久慈の

琥珀のなかの夕映え

小さな「爪の半月」と夜の月が呼び合う。胸が塞いでいるのだが、暗くはない。命の光のように「ほのかに光る」半月。じっくりと鑑賞したい（生）を見つめる一首だ。そして、白亜紀と今を繋ぐ琥珀を胸に置く歌は美しい。琥珀のなかの夕映えを見ている心には未来としての「あした」がある。

清廉な魂の歌

金子 智佐代

『小丸川の瀬音』は、長尾和守氏の第三歌集。二〇一一年から二〇一九年まで、年齢的には七十歳から七十八歳までの作品、四七三首を収める。

微笑みてをみな歩み来その視線車椅子のわが犬に向けつつ

巻頭の歌。柔らかい女性の笑顔から、その視線の先、「車椅子のわが犬」に読者をさりげなく誘導し、歌集前半のメイソングキャスト、特異な犬の存在を印象付ける。さらに、「舌を出し呼吸荒く車椅子を牽く犬なりゆるき坂道なれど」（集中22番目）、「下半身不随の犬を片方つつ妻と提げ持ち夜の散歩す」（集中38番目）をあわせ読むと、不自由な後ろ肢を乗せた車椅子を前肢で牽引する「わが犬」の姿が見えてくる。

褥瘡の癒えゆく犬の目にちから還り来、食

ひしん坊の戻り来

ふとんと窓辺に抱へ来て見する犬には終つひ

の雪かもしれぬ

犬のハル看んと階下におりてゆき『ハル、

よく来たね』の校正をしき

癒えゆく喜びを「還り来」「戻り来」のリフレイン、そのリズムで表す一首目。危篤状態の犬に、この世の最後の雪を見せようとする二首目。三首目は、ハルが十五歳八箇月で逝った後の歌。随想録『ハル、よく来たね』（二〇二二年）は、交通事故のため四歳で身体障害犬となったハルが、長尾夫人と共に長尾氏の任地、サウジアラビアに渡り、帰国するまでの四年半の記録。ハルについて作者は、「ゴールデン・レトリバーの血が入った黒毛の雑種」で、「妻のストレス軽減に貢献していた。その『ハル効果』は私にも及んだのは言うまでもない」と綴っている。だが、大型犬の排泄補助を含む長期にわたる介助、また晩年の介護の大変さは察するに余りある。集中、犬の歌九九首（21%）のうち、ハルに関わる歌は八三首。作者は、無理なく自然に、かつ、惜しみなく、退職後の時間と労力を注ぐのだった。ハルという命に向き合う愛情と覚悟、その人間力に打たれる。

妻と読むお経の息の合はぬまま時に参拝作

法を違たがふ

左手に杖、右の手に手摺持ち三百三十三の

石段のぼる

祖母も父もこの道に聞きたまひしか寂しく
徹る筒鳥のこゑ

愛犬ハルを見送り、震災三年後の東北を訪ね、奥穂高に挑み、冠動脈の手術を受け、しばらくの後、作者は四国巡礼の旅に出る。一首目には「区切り打ち（四国八十八札所を何回かに分けて巡ること）初回。」の詞書きが付く。供養や祈願等、巡礼の目的は様々だが、作者の決意の歌は見当たらない。二首目は第10番札所切幡寺。こうして作者は淡々と、行程途上の見聞や行動を一首一首、丁寧な描写によって積み上げてゆく。これは歌集を通しての、作者のスタイルだ。三首目は焼山寺道だろるか。聴覚が呼び覚ます記憶の切なさ、甘やかさ。ここは祖母や父と繋がる道でもあったのだ。

歩き遍路三十九日目とふリトアニア青年に

会ふ桐の咲く径

区切り打ち五度目は雨の日多かりき雨の彼

岸なり結願のけふ

一首目は、背の高い青年を見上げる視野に、より高い桐の花が見える、そんな空間の広がりの魅力だ。桐の歌は集中二首。もう一首は「桐の下駄の香りに似ると妻言へりわが拾ひ来し桐の花びら」。色や形でなく香りを焦点としてユニークだ。ちなみに作者は、「宮柵二の樹木の歌」で第四十三回評論賞を受賞された林学士。この論は柵二と牧水の歌、すべてに当たるといふ途轍もない労作だが、短歌の調査であれば労苦も楽しめる、そんな才能の持ち主なのだろう。集中、樹木

の歌は六十五首（14%）、種類は四十五種に上る。

二首目で結願を迎えた作者の次の行動はお礼参り、車による十一日間の通し打ち（札所を一度に巡ること）であった。巡礼の歌八十四首（18%）の根底にある、常に精進を求めてやまぬ作者の、純粹で清廉な魂、また、強靱な精神を思う。

語頭のン思へばアフリカ恋ほしけれンハン

デ次長またンゴロンゴロ山

夏まひる木の幹のぼる蟻の列 とほくアラ

ブに励みし日思ふ

タンザニアの「ンゴロンゴロ山」の歌を初めとして、作者のかつての赴任地、アフリカやサウジの歌は、歌集の処々でスパイスのごとく有効だ。ところで、第一歌集『エレファント・マーシユ』（二〇〇三年）の表題はマラウイ（アフリカ南東部）の川、第二歌集『母なるワジ』（二〇一一年）の「ワジ」は、サウジの降水時のみ流れる川。そして「小丸川瀬音も河鹿鳴く声もやさしと聞けりあかとき覚めて」より、故郷宮崎の川を表題とする今歌集。表題の川は、その時々作者自身を象徴する。三本の川は、現在の作者の人間力や精神力、清廉な魂を培った、その源かも知れない。

ニンゲンのよき伴として犬飼ひし平和な縄

文の長さ代ありき

歌集最終連「縄文犬」より。古代を作者独特の視点で照らし出すことで、その照り返しである未来という広やかな時空の、その平和への祈りを感じさせる、包容力豊かな一首。集中のハルの歌と静かに響き合っている。

百寿を目指して

森田治生

傘寿なるわれに古稀かと問う人の真顔に照れてビール注ぎたり

北條忠政さんがこのたび上梓された歌集『鳩寿燦々』の冒頭の歌である。傘寿の折の歌だが十年後の今もその若々しさは変わらない。本歌集は、傘寿を記念して編まれた第一歌集『生命の襷』に次ぐ第二歌集となり、平成二十四年夏から令和二年末までの作品四百八十五首を収める。

骨密度、血管共に六十台脳内年齢何歳ならむ

自転車にまだ乗るのかと失敬な八十八歳くるまにも乗る

驚異的ベストセラーを買ってみるピケテイの新著七百頁

学生時代に陸上で鳴らした作者だが、腰痛に悩まされ弱音を吐く歌も見られるが、骨密度や血管は実年齢より二十歳も若く、脳内年齢はさらに若いのではないか。肺活量は四千四百もあり看護師を驚かせてもいる。年齢だけで年寄り扱いされるのを嫌い、その思いをウイットを交えて詠んでいるのが

二首目。もつとも、高齢者の事故が増え運転免許証はその後返納している。三首目の「ピケテイの新著」は当時話題となった『二十一世紀の資本』で、ページ数が多く難解だと言われた。経済に精通しているからだろうが、大冊を読んでみようという意欲に若さを感じる。

万一の事があればの「万一」は暗証番号当てる確率

「就寝後」の薬有るのか眠剤に断りのあり

「就寝前」と

広告の「駅から二分」に嘘は無しされど

「出口まで五分」は言わず

普通なら見過ごしてしまうようなことにも視線は注がれる。一首目、四桁の暗証番号は0000から9999の一万通り。あてずっぽうで当たる確率は一万分の一で、確かに「万一」である。二首目、「就寝後」があるから「就寝前」と書くのかと詠む。寝てしまったら眠剤は必要なのにと突っ込みを誘ってユーモラス。三首目、大江戸線の駅だろうか。都合の良いことだけ言って、都合の悪いことは隠す広告をやる

わりと非難する。さまざまなことに視線を注いでいるが、理屈に合わないことや狡いことは座視できないようだ。

あとがきには「関心のある題材は世の動きに向かう。いわゆる時事詠、社会詠だ。」と記されている。そんな時事詠、社会詠に作者の本領が発揮される。自身の姿勢が明確で、見方が射ているので読んでいて痛快である。

多少とも景氣指標は良くなれどわれは名付
けむ「綿飴景氣」

秘密法・安保法成り「一億」の標語が出来
て布石は万全

列強に相次ぎ「一強」現れてワールドワイ
ド霧立ち初める

詠む歌の題材一つ消え失せぬ揶揄の標的ト
ランプ去りて

見え透いた嘘の辻褃合わせむと嘘がうそ産
む「桜見る会」

一首目、実態は大したことないのに、見かけと甘さだけでごまかす経済政策の欺瞞を元経営者の目から喝破している。

二首目、戦争を経験した者として再びあの時代に戻る動きを危ぶむ。秘密法（特定秘密保護法）に治安維持法、安保法（安全保障関連法）に海外派兵、一億（一億総活躍）に「一億玉碎」など、戦争につながる動きを見透かす。「布石は万全」と政府のほくそ笑む様を詠んで警鐘を鳴らす。

三首目・四首目、日本では安倍一強と言われ、アメリカにはトランプ大統領が登場した。二人とも一線を退き詠む対象

からは消えたが、霧は晴れたのだろうか。五首目、安倍内閣の退陣とともに、問題はうやむやになってしまった。検察審査会は不起訴不当としたが、さてどうなるのか。作者にとつて時事詠、社会詠の題材が消えることはない。

十八年やもめなりしがわれはもや安見兎得
たり八十五にて

「独り身を卒業せり」と書けば友「施設入
りか」と訝る返信

味噌汁の豆腐の切りよう争いて「賽の目」
勝ち取る先ずは一勝

奥様を亡くされ独り暮らしを続けてきた作者は、八十五歳にして「安見兎」を得た。二首目の「友」の反応は年齢を考えたら不思議はない。その後も、素直に喜びを詠んだ歌が続く。三首目、とは言っても日常生活での細かな行き違いは当然出てくる。新婚の小さな諍いが微笑ましい。続く歌で「諍いは一勝九敗に甘んじるわが寛容を知るわが妻」と詠み、夫婦円満の秘訣を教えてくれる。ただ、「一勝九敗」は作者のように心の広い人でないと難しそうだ。

妻と来て多摩川の虹仰ぎけり鳩寿燦々今を
生きおり

本書の最後を飾る一首。九十歳を迎えて「燦々」と言える生き方をされていることに敬意を表したい。数首前には「百歳の上には皇寿・茶寿があり先ずは目指さむ節目の百寿」という歌がある。傘寿、鳩寿を記念して歌集を上梓された北條さん、百寿での第三歌集をお待ちしています。

一万本のアスパラ

伊藤 幸子

北海道旭川市の青野多都留さんより、第一歌集『農婦の証』を拝掌した。昭和13年生まれで、二〇〇〇年以來コスモス誌に掲載の379首が収められている。農業の町東神楽町で、蚊取線香の原料の除虫菊の生産日本一の土地柄という。氏は厳しい自然条件の中、兼業農家の主婦として過ごして来られた。

① 雪や雪降る雪父の形見なる目出し帽かむる
雪搔きせんと

② 月光に豆堆^{まほ}明るむ丘の畑へ豆脱スレッシヤ
ーのエンジン響く

③ 老いてなほ一万本のアスパラの苗を植ゑを
り夫と四時から

①は巻頭歌。「父の形見なる目出し帽」が日常語としてさりげなく暮らしにとけこんでいる。②の豆脱スレッシヤは詳しく見たことがないので、農家の同級生に聞いてみたら豆の脱穀機のことの由。豆堆、稲堆もなつかしい風景だ。今は自然乾燥よりも機械ですませるのであまり見かけなくなつたようだ。

③一万本のアスパラとは想像もできないが、グリーンアスパラは50年前、ご主人が考案された作物で、アメリカから種子を導入し、発芽、出荷にこぎつけた苦労話も添えられる。私の子供時代にはアスパラによく似た「ショウデンコウ」と呼ぶ植物があつた。どんな香りがしたかは忘れたが瑞々しい穂の形状がアスパラとよく似ていた。

青野さんの作品は、みな対象がはつきりしており、「二町歩のアスパラ畑を日に二回歩めば二万を超す万歩計」とか「一時間に一センチ伸びるアスパラ」等、思わず畑についていつて確かめてみたい思いにかられる。

「去年より十日も遅きアスパラの収穫作業に猫車押す」このネコ車が全国区になつたのは半世紀も前だつたらうか。私などは10kgの荷物も運べないが、村のシニアさんたちはいともたやすく30kgの米袋も持ち歩く。今はきれいに印刷された袋だが、つい近年までは俵や唄^{かます}が使われていたものだ。

④ 緊張し撮れる写真はパスポートに六十路の
農婦それなりの顔

⑤ バタフライうまく泳げず気分替へ派手な色

柄の水着をまとふ

⑥ 夫と二人トルコに着きて満月の夜のベンチ
で庄内柿食む

さあ、畑からもアスパラからも解放されて海外に飛び出しました。トルコの満月のベンチ、「聳えたつピラミッド目指し夫と二人ラクダに乗り」と詠まれる至福の時間。厳しい労働の合間にも、水泳によって心身のリフレッシュをはかる青野さんのライフスタイルに拍手。「今年こそ冬の漬物減らさむとすれどやつぱり五樽となれり」秋の漬物作りは主婦の大切な行事、一斗樽四斗樽などの容器に家々の味を漬けこむ主婦の腕の見せどころである。

⑦ コンテナの底に敷き置く新聞に短歌欄あり
仕事の手止む

⑧ 競ひつつ稲を刈りたる日の恋しコンバイン
の音野良に響けば

⑨ 畑仕事に一夏履きし地下足袋の踵減りしを
また仕舞ひおく

農村も機械化が進み、海外からの研修生も増えてきている。鎌を使つての刈り取り作業も遠くなった。しかし一町歩田などといわれる広大な田で大型機械がただ一台、黄色い稲穂の波の中で作業しているのを見ると遠くからでも声をかけたくなる。田植のころは運転手に、よく水酔い現象があらわれるという。機械エンジンの音にまじって、人の声の恋しくなる作業風景といえようか。

⑩ 元号は令和となりて初の日にピーマン五十

箱出荷せり

⑪ 古い二人互ひに菓たしかめて五月の大型連
休に入る

⑫ 起き出でて朝の鏡に見る顔の皺に気づけり
農婦の証

⑬ オホーツクの海明け近しひもすがらハウス
の枠にビニールを張る

気宇壮大な生活詠。新元号の日から令和も三年たった。⑫は集名となった「農婦の証」。まあシワは誰にでもできるものですし、終の日までつきあつていきましょう。⑬のこの歌、この作業。屈強の若者ならいざしらず、高齢女性の体力と巧緻な技術、運動神経につくづく感心させられた。

⑭ 冬の間を充電したる身体にて背筋のばして
春へと向ふ

⑮ 数へ年八十歳かと鏡見て眉かきうすく口紅
をさす

数え年八十歳ですか、渾身の379首を読み終った。私はかたわらに宮先生の『忘互亭の歌』を開き、「大雪山の老いたる狐毛の白く変りてひとり径を行くとふ」を口ずさみながらゆきつもどりつしている。

広大なかの地で種を蒔き、耕地の手入れをされて八十歳の歌を詠まれる青野さん。同、宮先生のお作に「雪白き大雪の山分け入れは紺るりの湖うみひとつしづまる」があり、未踏の地、私の限らない憧れとなっています。